

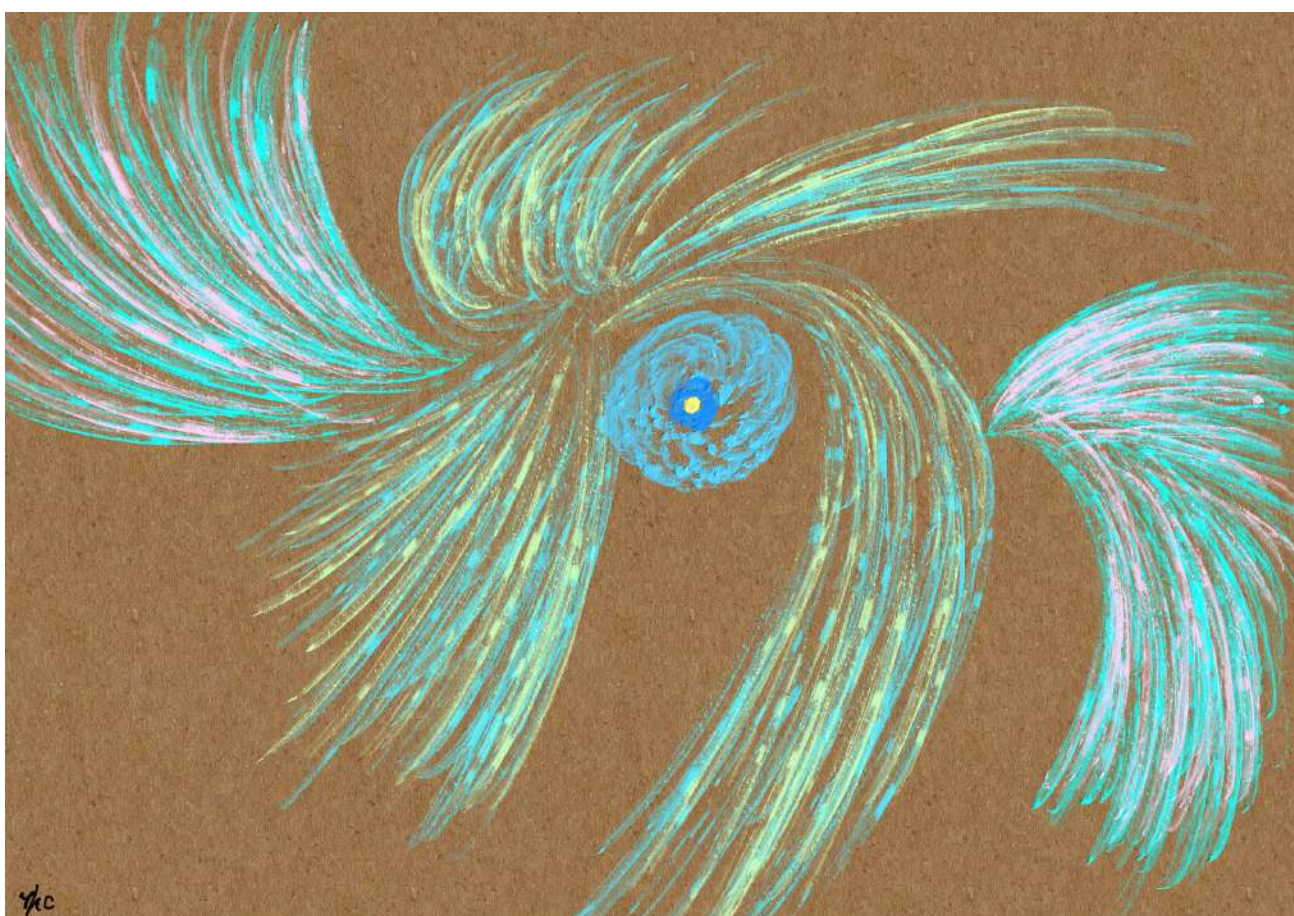
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 319

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1509 夜明け前の光\_Light Before Daybreak

---

## 目次

- 6361. 【金沢滞在記】金沢能楽美術館と泉鏡花記念館を訪れて
- 6362. 【金沢滞在記】金沢を出発する朝に
- 6363. 【金沢滞在記】来年の旅について思うこと
- 6364. 【東京滞在記】秋めいた東京の朝に
- 6365. 【東京滞在記】米原行きの新幹線を待ちながら
- 6366. 【福井滞在記】福井滞在2日目の朝に
- 6367. 【福井滞在記】「万生」の時と一体となって
- 6368. 【福井滞在記】進むもの
- 6369. 【福井滞在記】今回の一時帰国での出会いを振り返って
- 6370. 【福井滞在記】自由と解放を感じて/今朝方の夢
- 6371. 【福井滞在記】最後の観光を終えて
- 6372. 【福井滞在記】今朝方の夢と明日のこと
- 6373. 【福井滞在記】フローニンゲンに戻ってからの楽しみ
- 6374. 【大阪滞在記】関空近くのホテルより
- 6375. 【大阪滞在記】出発の朝に
- 6376. 【大阪滞在記】日本出発前夜の夢
- 6377. 思わぬ形でのバルト3国との接近
- 6378. アムステルダムに向かう機内より
- 6379. 機内で思うこと
- 6380. 始まりの始まり/多様な生命時空間

時刻は午後5時を迎えようとしている。本日、金沢滞在の最後の観光を終えた。

自分は晴れ男なのか、日本に帰って来てからの観光では天気恵まれ、各所を気持ち良く巡ることができている。天に本当に感謝したい。

今日はまず最初に、金沢能楽美術館に足を運んだ。一昨日にその場所を下見しており、ホテルから迷うことなく目的地に到着した。まだ本格的に能の鑑賞に乗り出しているわけではないが、以前から能は気になる伝統芸能であった。この美術館が提供している能面・能装束の着装体験や能の楽器の演奏体験をしたいと思っていたが、コロナのせいで今日はそれらが体験できなかった。

ちょうど今は企画展として、「能楽入門其の一」というものが行われていた。能は室町時代に観阿弥と世阿弥によって大成された伝統芸能であることはよく知られているが、企画展の説明の中に大変興味深いものがあった。その説明曰く、「能はあらゆる生命を祝福し、平和や幸せを願うとともに、無念の思いに寄り添い、その魂を沈める「祈りの芸能」である」とのことだった。展示されている能面や装束を眺めながら、能が表現する世界観にしばし浸ることができた。

館内はそれほど広く無いのだが、1つ1つの展示物をくまなく見ていると、随分と時間が経っていた。この美術館を訪れたことによって、能、さらには禅の世界観を作曲に体現させるような試みに着手してみようと思った。館内でずっと流れていた能の音楽が脳裏に焼き付いている。

次に足を運んだのは、泉鏡花記念館である。金沢能楽美術館の職員の方が親切にも、ワンデイパスポート(510円でなんと17箇所も回れる)について教えてくださり、それを用いて泉鏡花記念館には無料で入れた。端的には、この記念館に足を運んで本当に良かったと思う。

以前より、泉鏡花については少しばかり知っていたが、今回この記念館に足を運ぶことによって、泉鏡花の思想と芸術世界に大変感銘を受けた。泉鏡花の幻想的かつ超越的な小説世界を知る展示やミニシアターを大いに楽しんだ。帰りがけには、ミュージアムショップで参考文献を1冊ほど購入し、今夜はそれを熟読しようと思う。

---

泉鏡花は、ロイ・バスカーでいうところの「実在界」、西田幾多郎がいうところの「絶対無」の世界を言葉を用いて表現した。あちらの世界とこちらの世界を見事な言葉で媒介したことに、大変感銘を受けた。泉鏡花にとっては、あちらの世界がこちらの世界と同じくらいにリアルに感じられたのだろう。泉鏡花の夢と美の世界が、今自分の内側の感覚の何かと共鳴している。それは、今夜の夢の世界に何かしらの影響を与えるかもしれず、明日の現実世界に何かしらの影響を与えるかもしれない。

金沢:2020/10/29(木)17:22

### 6362.【金沢滞在記】金沢を出発する朝に

時刻は午前6時を迎えた。今、金沢の朝の空が静かに明けてきた。今日は少しばかり雲があるが、ここから晴れ間がより広がっていくようだ。

今日は金沢を出発し、東京に向かう。今回の一時帰国中に東京に向かうのはこれで2度目である。前回は、現代アーティストの小松美羽さんとの対談講演会のために東京に向かい、今回は知人の鈴木規夫さんとの対談セミナーのために東京に向かう。鈴木さんとの対談は実に3年ぶりであり、対談時間も3時間と長く、今から非常に楽しみである。

今回は、鈴木さんの知り合いのセラピストの方のオフィスで対談をさせていただくことになっていて、そこにオンラインを通じて参加者の方々が参加することになっている。セミナーの開始が午後3時からであり、2時に撮影現場に到着する必要がある。一度東京駅近くのホテルに荷物を預け——可能であればチェックインをしたい——、それから撮影現場に向かう。時間を逆算すると、金沢のホテルを出発するのは午前9時過ぎ頃がいいだろう。

ホテルをチェックアウトし、北陸新幹線のチケットを余裕を持って購入する。北陸新幹線に乗車するのは今回が初めてであるから、それもまた楽しみだ。09:46の新幹線に乗り、2時間半ほどの列車の旅を楽しめば、比較的すぐに東京駅に到着すると感じられるだろう。

改めて、今回の金沢の旅を振り返っている。一言で述べるならば、それはとても充実していた。鈴木大拙、西田幾多郎、泉鏡花との出会いがあり、いくつかの心を動かす美術品と出会うこともできた。そして何より、金沢の街の景観と紅葉に癒され、この街が持つ固有の時空間に包まれていたこ

---

とを思い出す。金沢の街を訪れて、本当に良かったと思う。ここでの体験は、自らの肥やしとなり、これからの緩やかな成長を後押ししてくれるだろう。

今日は東京に滞在し、明日の午後に福井に移動する。福井滞在がいよいよ今回の一時帰国中の最後の滞在拠点になる。母方の上り藤にゆかりのあるこの地で何を感じ、何と出会うだろうか。福井で足を運びたい場所についていくつか調べているが、滞在中のどのタイミングでそれらの場所に行くのかは、いつものようにその日の朝に決めたいと思う。

先ほどよりも明るくなってきた金沢。それに照応するかのように心も明るくなっていく。今日もまた充実した1日になるだろう。今すでにそれに対して感謝をし、感謝の念を持ちながら今日という日を過ごしていこう。金沢:2020/10/30(金)06:15

### 6363.【金沢滞在記】来年の旅について思うこと

時刻は午前10時を迎えようとしている。つい先ほど、金沢を出発する北陸新幹線「かがやき」に乗車した。大阪から金沢に来る際に乗ったサンダーバードのグリーン車よりも、今乗車している新幹線のグリーン車の方がゆったりしている。ここから東京まで2時間半ほどあり、その間にいくつか仕事をしておきたい。仕事が終われば、作曲をしたり、読書をしたりして過ごそう。

金沢からは、富山、長野、大宮、上野、そして終点の東京の順に止まる。今日は晴れであるから、その間の景色を時折楽しみたい。

先ほど、座席に備えつけてある雑誌に目を通していった。ぼんやりとそれを眺めながら、来年は青森や北海道に旅行してみようかと思った。季節としては今年と同じぐらいに日本にやって来て、青森と北海道でのんびりと過ごしたい。

来年もまた大阪と東京でセミナーや講演会などをするかもしれない、両都市に足を運ぶ可能性もあるが、一時帰国中はできるだけゆっくりしたいと思う。振り返ってみると、今回の一時帰国においては随分と多くの場所に足を運んでいたことがわかる。実は今日からの東京は、比較的直前に決まったことであった。来年は今年よりもゆったりと日本で過ごそう。

---

分別と無分別の大切さについて思う。前者は理性を働かせ、後者は感性を働かせて実現されるものである。どちらかではなく、現実世界で生きていく際にはどちらも大切になる。創造活動に従事する際にも、それら両方が発揮される必要がある。

ポストモダンではなく、メタモダンの時代について先日考えていた。ポストモダンのように、価値観が多様化し、拠って立つべき価値観が溶解してしまう状況からさらに状況は複雑になっている。

今から少しばかり仕事をしたら、作曲実践をまずしよう。泉鏡花も述べていたように、他者の評価ではなく、自分が納得する形で自己表現を行なっていく。そうした自己表現は、内部から湧き立つ幸福感をもたらしてくれる。

今、富山に到着した。富山の空は晴れているが、モクモクとした白い雲の塊が見える。東京に向かう新幹線の中で:2020/10/30(金)10:03

#### 6364.【東京滞在記】秋めいた東京の朝に

時刻は午前8時に近づいている。今、東京駅の真横にある丸の内ホテルの自室でこの日記を書いている。

今日の東京は快晴であり、土曜日ということもあってか、東京駅近郊は落ち着いた雰囲気を出している。土曜日の早朝に、ガタゴトと走る列車の音が聞こえてくる。東京もすっかりと秋の雰囲気になっていて、朝の陽光は優しく、肌寒さがどこか心地良い。

昨日、知人の鈴木規夫さんと3年振りに対談をさせていただいた。オンラインの対談は3年前に『能力の成長』を出版した時に行わせていただいたのであるが、リアルな場での対談は実に4年振りであった。ここで当日の対談についてあれこれ書くことはしないが、非常に濃密かつ有意義な時間を過ごさせてもらったことに大変感謝している。それは対談相手の鈴木さん、そして対談を裏で支えてくださった方々のご尽力、さらには対談に参加してくださった方々の温かい眼差しのおかげかと思う。

---

対談会場に向かう際に、丸の内線と銀座線に乗った。コロナ対策なのか、車内の窓が少し開いていて、地下鉄が走る際に発する切り裂くような音がとても不快であった。思わず私は手で耳を覆い、その不協和音の渦に耳がやられないようにした。

欧州の街を巡り、今回日本でも種々の街を巡ってみると、自分が生誕した東京という街そのものに対しては言いたいことがたくさんある。ただそれらはことごとく否定的なものであるため、それらについてもここであえて書くことをしない。この街でどうやって人間として生きていけるのか不思議でならない。人間であることを放棄してまでこの街で住む必要などほとんどないと思うのだが…。この世界には、人間であることを深く、そして生き活きと実感させてくれる場所がたくさんあるというのに。

昨日は、対談を終えた後に、麻布十番の「We Are The Farm」というお店に連れて行っていただいた。そこで今回の対談の関係者の6名と一緒に夕食を共にした。この店の野菜は新鮮であり、全ての料理が美味であった。何度も舌鼓を打ち、終始会話に花が咲いた。結局、夜の10時半までお店にいて、ホテルに到着して就寝したのは12時半であった。

社会的な生き物として生きていく上で、たまには娑婆の世界で人と交わり、普段のリズムからあえて逸脱することもまた良きものなりと思った。年に1度、日本に帰って来て大切な人たちと会う時ぐらいは、リズムからの逸脱があって良い。

今日はこれから絵を描き、作曲実践を少々して、ホテルの朝食をゆったりと摂る。今日からはホテルの朝食は和食にしようと思う。今朝の朝食、そして明日からのホテルの朝食においては和食を食べ、日本的なものに最後に触れる形でオランダに戻っていこう。

朝食を摂った後、スーツやビジネスシューズなど、今回の一時帰国に際しての対談で使ったものを実家に郵送する。昨日ホテルの方に確認したところ、小さな段ボールを購入し、それに詰めて送ることができるかと教えてもらった。荷物の整理をした後に、ホテルの隣にある丸善丸の内に行き、そこで今回の一時帰国に際しての最後の書籍の吟味を行う。数冊ほど良き本と出会うことができたら幸いだ。書籍の吟味後、そこからゆっくりと福井に向かう。

東京駅から福井の宿泊先のホテルまでは3時間半ほどである。いよいよ今回の一時帰国の旅も大詰めを迎えようとしている。東京:2020/10/31(土)08:12

---

時刻は午後2時を迎えようとしている。今、新幹線の駅構内のジオオーガニックカフェという店にいる。米原行きの新幹線を待つがてら、オーガニックブレンドコーヒーを飲みながら一息ついている。先ほど、丸善丸の内を出発し、今に至る。

今回の一時帰国中においては、滞在先のホテルでGo Toキャンペーンのクーポンをもらうことが多く、今回宿泊した丸の内ホテルでも1枚千円分のクーポンを6枚もいただけた。これは飲食店のみならず、丸善丸の内などの書店でも使うことができ、先ほど6千円分のクーポンを使って、3冊ほど書籍を購入した。1冊は、昨日知人に教えてもらった中野剛志さんが執筆した『富国と強兵』という書籍であり、もう1冊はジャック・ラカンの入門書、そしてもう1冊は現代音楽の作曲技法に関するものである。京都でもクーポンを使って書籍を購入したのだが、今回もこのような形でクーポンを用いて和書を購入することができて嬉しく思う。

丸善丸の内の4階には洋書コーナーがあるので、そこを覗いてみたところ、なかなか面白い本が揃えられていたが、洋書はオランダで購入した方が圧倒的に安く、さらには特定分野に関して一気にまとめ買いをすることに関してもオランダの方が容易なので、丸善丸の内では洋書を購入することはなかった。オランダに戻ったら、映画評論に関する書籍、それも社会学、心理学、哲学の観点から映画を分析している書籍を一括大量注文しようと思う。

今回日本の様々な場所で――書店のみならず、美術館や記念館などでも――随分と多くの和書を購入し、旅の最中で時間を作って次々と読んでいった。初読は全体像を把握することを心がけており、精読的な再読を行うのはオランダに戻ってからにしよう。もう約4週間ほど日本語空間で生活していたこともあり、自分の思考の中はすっかり日本語が居場所を占めている。

来週の水曜日からは再びオランダでの生活が始まる。そこでも今回持ち帰ることにした和書を読み進めていくが、自然と英文書籍にシフトしていくというのが常である。思考空間の緩やかなシフトを楽しもう。これまでお世話になっていた編集者の方が今月から独立することになり、昨日、対談会場で挨拶をさせていただいた。その時に、川瀬巴水(かわせはすい:1883年-1957年)とうい大正・昭和期の浮世絵師かつ版画家のはがき集をいただいた。



---

川瀬巴水という芸術家を知らなかったので、色々と調べてみたところ、日本各地を旅行し、旅先で写生した絵を原画とした版画作品を精力的に創作していたという点に関心を持った。日本的な美しい風景を叙情豊かに表現したことから、「旅情詩人」とも呼ばれており、旅をしながら絵や音楽を作っている自分に共鳴するものがあった。どうやら日本国内よりも海外での評価が高いらしく、葛飾北斎や歌川広重などと並び称されるほどの人気があるとのことであり、ここから川瀬巴水の作品を意識して鑑賞してみようと思う。

さて、もう少ししたら新幹線がやって来る。東京から米原までは2時間強の列車の旅であり、米原から福井までは1時間ほどの列車の旅になる。どちらもグリーン車に乗車することにし、ゆったりとした空間の中で仕事をしようと思う。仕事が終わる次第、先ほど購入したラカンの書籍を読んだり、作曲実践をしたい。福井はどのようなところなのか、期待に胸が小踊りする。東京:2020/10/31(土)

14:12

#### 6366.【福井滞在記】福井滞在2日目の朝に

時刻は午前5時を迎えた。今朝は午前4時半に起床し、先ほど朝風呂に入った。振り返ってみると、日本に一時帰国してから終始一貫して良いリズムで生活ができていたように思う。夜は早めに就寝し、朝早く起きることは、単なる生活上の習慣を超えて、人生の習慣となった。そしてそれは人生そのものになった。そうしたものをこそ、本当の習慣と呼ぶのだろう。

この時間はまだ辺りは真っ暗だが、その分、満月の輝きが美しく見える。ちょうどホテルの自室からまん丸の満月を拝むことができている。今日の福井の天気は晴れだが、明日は強めの雨が降るそうだ。今回一時帰国して初めての雨かもしれない。

京都に移動した初日も雨が降ったのだが、それは小雨であり、傘を差さなくても問題ないぐらいであった。そうしたことを考えると、やはり最初の雨かもしれない。最初の雨が福井滞在最終日、すなわち今回の一時帰国の観光における実質上の最終日に降ることは興味深い。

明日は雨、本日は晴れであることを考えると、今日はホテルから歩く距離が長い方の美術館である福井市美術館に行く。ホテルからは4kmほどの距離であり、歩くと片道40分以上かかるが、程よい運動になるだろう。常設展として、敬愛する森有正先生と親交の厚かった彫刻家の高田博厚氏の

---

作品を見ることができる。高田氏は、2歳から18歳までの多感な時代を福井で過ごしたそうであり、彼の作品にはこの地の何かが反映されているに違いない。

今朝方はぼんやりと夢を見ていた。起床直前の無意識の世界に、種々のイメージ群が立ち現れていた。その中でも記憶に残っているのは、前田利家にゆかりのある見知らぬ人が登場していたことである。金沢を統治していた前田利家が夢に現れたのは、数日前まで金沢に滞在していたことの影響だろうか。夢の中の感覚としては、不思議な高揚感があった。

時刻は午前5時半を迎えた。今から絵を描き、作曲実践をしてから読書をする。朝食は午前7時半か8時から摂ることにし、朝食後、少し自室で休憩をしてから美術館に向かおう。

昨日ふと、ホテルのグレードによって客層が異なることを考えていた。今回の一時帰国において、少しばかり実験的に色々なグレードのホテルに宿泊してみた。色々なグレードと言っても、それなりのものでなければ安心して滞在ができないため、最も低いグレードであってもそれなりに快適に過ごすことはできている。とは言え、やはり四つ星や五つ星を獲得するホテルはとても品があって快適であり、四つ星と五つ星との間には随分と大きな溝があることも多いことに気づく。

客層に関して言えば、三つ星のホテルになってしまうと、四つ星以上とは随分と違う。このあたりも見えない格差、あるいは居住地が経済・文化的資産の多寡によって分けられてしまうというゾーニング的なものを見ることができる。こうした傾向は今後も静かに進行し続けるだろう。福井:2020/11/1(日)05:39

### 6367.【福井滞在記】「万生」の時と一体となって

—Respondeo, ergo sum. (私は誰かに応答している、ゆえに私は存在する)—フリードリヒ・ハイネマン

時刻は午後3時を迎えた。先ほどホテルの自室に戻ってきて、仮眠から目覚めたところである。

今日は午前中から午後にかけて、福井市美術館に行ってきた。ホテルからは歩いて40分以上かかったが、道中の景色と雰囲気は素晴らしく、散歩を存分に楽しんだ。一級河川である足羽川沿い

---

を午前中に歩いていると、自分がいる時空間が変容しているように感じられた。そもそもその場の時空間が特殊なものだったのか、はたまた自分の内的な時空間と混じり合うことによってそうした不思議な時空間が生まれたのかは定かではない。

生物学者のヤコブ・フォン・ユクスキュルが述べた「環世界」という言葉について自ずから思う自分がいた。ススキの時間、蝶の時間、小川の時間、秋風の時間、そして現地の人々の時間。それらの時間はそれぞれ異なっていて、それらは複雑に混じり合っている。私は、そうした複雑に混じり合った時間の中にポツリと佇んでいて、自分の時間感覚が変容していることに気づいたのである。「この世界に固有な存在として在るということは、こうした体験を通じて気づかされるのだ」ということを思った。

何かに導かれるようにして福井にやって来て、秋の太陽光が降り注ぐ福井の街をぼんやりと歩いている自分。地方都市には東京とは違った寂寥感が漂っているのだが、その寂寥感の中に無常さの輝きを見る。これは昨年までなかった気づきである。昨年までは、地方都市の廃れた感じが醸し出す何とも言えない感覚が身を包み、その感覚のさらにその先にあるものを感じる事ができていなかった。だが今年は、もうその先を感じられるようになっている。無常さの先には、こんなにもほのぼのとした温かいものがあるのだ。

感覚が自然と目一杯開かれ、様々なものを感じながら歩いていると、美術館が見えてきた。福井市美術館は大きな公園の中にあり、今日は日曜日であったから、家族連れが多く、どこか平和な感じがした。

ちょっとしたことに心動かされる自分。家族連れの両親たちが、子供たち同士が楽しそうに遊んでいる様子を眺めながらベンチで腰掛け、何やら楽しそうに対話をしていた。対話がそこにあるということに、私は無性に嬉しくなった。公園の道ですれ違った若い父親と娘が私に挨拶をしてきたこと。それもまた自分の心を動かすには十分だった。まだ世界には心を持った人間がたくさんいるということ。そして彼らは対話を通じて心を通わせているということが、小さいながらも途轍もない喜びの感情を私にもたらした。

---

公園の芝生の上では、小さな子供たちのためのラグビー教室が行われていて、子供たちが体を動かしているその脇で、宇多田ヒカルの懐かしい曲がかかっていた。その曲に耳を傾けながら、私はしばらく子供たちが体を動かす様子を眺めていた。

しばらくしてからその場を離れ、美術館脇の小道に戻ると、美術館の外堀に小川が流れていることに気づいた。それはある方向から別の方向に流れていて、それを見た時、これが人生だと思った。「人の生」だけではなく、「万物の生」であるから、「万生」と述べた方がいいだろう。文字通り、生きとし生けるもの、さらには社会も宇宙も含めた万物の流れをそこに見て取った。それは啓示的な気づきだった。その気づきに触れた時、思わず目頭が熱くなった。

その瞬間が自分を含めた万物の流れの中に還っていき、それは万物の流れ全体と1つになる。自分に固有の瞬間が、自分を超えた存在たちが生み出す全体としての時間の中に還り、それと1つになるという神秘さと美しさ。私の心と魂は、すっかりそれに打たれてしまった。気がつくと、小川を流れていた落ち葉がどこかに消えていた。それは運ばれるべき場所に運ばれていったのだと知った。  
福井:2020/11/1(日)15:31

#### 6368.【福井滞在記】進むもの

時刻は午後6時を迎えようとしている。午後2時あたりにホテルに戻ってきて仮眠を取り、そこから2本ほど映画を見た。映画というのもまた、そこに固有の時空間が存在していて、良い作品であればあるほどその時空間にこちらを飲み込む力がある。そして、ひとたびその映画を見終えたら、もうそれを見る前の自分ではないという現象が生じる。それはまさに真の芸術が持つ力と同じである。

誰かに聞いてほしいことがあり、誰かに見てほしいことがあるということ。福井の街が静かにそれに気づかせてくれた。誰かに聞いてほしいことや見てほしいことを伝えていく責任。私たち1人1人にはそうした思いと責任が本来あるのではないだろうか。「責任」という言葉を前にすると、思わず尻込みをしてしまうかもしれない。これまでの自分がまさにそうであったように思う。

今年もまた日本に戻ってきたことが不思議でならない。あと何回日本の土地に足を踏み入れ、あと何回日本の空気を吸うことができるのだろうか。もうそのカウントダウンが始まっていることを知っている。

---

---

福井にいる今の自分。昨日の朝はまだ東京にいた。一昨日の朝は金沢にいたのである。明後日は大阪に移動する。関空近くのホテルに移動して、いよいよ明々後日にはオランダに戻る。そう、自分が本来いる場所に帰っていくのである。

自分が本来いるべき場所に戻っていくということ。帰還に伴う心の揺れを感じる。こうした揺れが内的成熟を後押しするのは確かだが、まだこの感覚に慣れていない。いつもこの感覚を感じるたびに目新しさと同時に、どのようにこの感覚と向き合えばいいのかを考えてしまう。考えるのではなく、感じよう。ただそれを感じるままに感じ、その感覚が自己の深層に沈んでいくまで感じ切るのである。

一昨日、知人の鈴木規夫さんと東京で対談セミナーを行った。その時に、3、4年振りに会う知人が何人かいて、その方々に自分がより自由になった感じがすると言われた。以前に自己を覆っていた重たい鎧が取れてきて、解放的かつ自由になったと言われたのである。言われるまで気づかなかったが、言われてみて、確かにそうかもしれないと思った。

私たちの魂が本来持つ軽やかさ。私たちの魂は本来自由である。その自由さが自分の内側から滲み始めてきた。依然として魂のくさびが残っているかもしれないが、そのくさびが徐々に消えていき、より自由で解放的な魂がここに顕現し始めている。それを感じている自分が今ここにいる。

本日訪れた福井市美術館で見た高田博厚氏の一連の彫刻作品の数々。なんと素晴らしい造形芸術であっただろうか。高田氏は30歳でフランスに渡り、そこから27年間の月日をパリで過ごし、57歳で日本に戻った。彼の生き様と自分の生き様を自然と重ねてしまうことがあり、常設展の最初の展示室で流れていたドキュメンタリーを見ていると、思わず込み上げてくるものがあった。

自分はいったいこれからどこに向かい、どのように変貌を遂げていくのだろうか。それは全くもって未知であるが、今の自分では想像できない場所に辿り着き、そして変貌を遂げることだけは歴然として判明している。こうした未知と既知のせめぎ合いの中を生きているのが人間であり、そのせめぎ合いの中で進んでいくのが発達なのだ。福井:2020/11/1(日)18:13

### 6369.【福井滞在記】今回の一時帰国での出会いを振り返って

時刻は午前4時半を迎えた。今日がいよいよ実質上最後の福井滞在の日となる。

---

---

今日は、福井県立美術館に足を運ぼうと思う。昨日と同様に、ゆっくりとホテルのレストランで朝食を摂り、部屋で休憩をした後に美術館に向かう。昨日訪れた福井市美術館までは歩いて40分以上かかったが、今日訪れる福井県立美術館までは距離が短いので、20分弱で到着できるだろう。何やら今日は午前中から雨が降るらしいので、折り畳み傘を忘れずに持って行こうと思う。

京都においては明恵上人との出会いがあり、金沢においては鈴木大拙、西田幾多郎、泉鏡花との出会いがあり、福井においては高田博厚との出会いがあった。彼らのような偉人たちが生きた場所で、彼らの残した功績の数々に直接触れることができたこと。それは何にも代えがたい贈り物のような体験であった。そうした恵みを糧として、これからの歩みをゆっくりと進んでいこう。オランダに戻ってからの探究活動と創作活動において、今回の一時帰国での数々の出会いと体験は必ずや自分の支えになってくれるだろう。そしてそれらは、一生涯を通じて自分の肥やしになってくれるに違いない。

彼らのような本物から多くのことを学んでいくこと。それを大切にしていく。彼らに関する記念館や美術館で購入した一連の文献を何度も繰り返し読みながら、その場で感じた感覚をさらに深めていこう。

昨日は、福井市美術館で高田博厚に関する文献史料を購入した。昨夜はそれを最初から最後まで食い入るように眺めていた。正式な芸術教育を受けることなく、独学で彫刻の創作を続け、己の精神と技術を彫琢していった高田氏に大きな感銘を受けた。真芯から共鳴するものがあつた。

今回の一時帰国は本当に、高田氏を含め、第一線級の仕事を成した人たちとの出会いがあつた幸運に恵まれた。そのことにただただ感謝の念で一杯であり、こうした出会いがある限り、また日本に戻ってきたくなる。

旅行中の今は読書も創作活動も限定的であるが、オランダに戻ったら、再び旺盛な取り組みをしていきたい。読書に関していえば、自分にとって重要な書籍は、TOEFLやGREを受験した時に行った単語学習のように、短い期間に何度も繰り返し読んでいくことを改めて意識してみよう。何回回転させるかという回転数と、回転させる期間を空けないようにするという回転率を考慮して、骨身に染み込ませる知識をうまく定着させていきたい。

---

以前に述べたように、自分はここからまっさらな状態で一から探究を始める。高田氏がある時、全作品を破壊して一から創作活動をやり直したのと同じように、これまで積み重ねてきたことを全て打ち壊してしまっている。

打ち壊して残ったもの。それこそが自分の内奥に定着したものであり、それこそが自分が我がものにした知恵なのだろう。また、そうした知恵すらも脇に置くぐらいの形で、もう一度再出発を果たしたい。それができた時、今から数年後には、今の自分が全く想像できないところに自分はいるのであろうし、全く想像できない自分がそこにいるだろう。それこそが真の発達である。福井:2020/11/2(月)

04:47

### 6370.【福井滞在記】自由と解放を感じて/今朝方の夢

時刻は午前5時に近づいている。この時間帯はまだ真っ暗であるが、街頭の明かりによって街の地面が見える。昨夜雨が降ったのか、地面は濡れている。今は雨は降っていないが、午前中から雨が降り始め、今日は一日中雨となる。

明日は関空近くのホテルへの移動するので、今日は今回の一時帰国における最後の観光日であり、最後の観光日を雨で締め括るのもまた一興である。それは喜びの涙のようだ。

先日東京で対談セミナーを行った際に、数名の知人たちから、自分が自由になり、軽やかになったというフィードバックをもらった。本当にそうかもしれない。それは自分の表情や身振り手振りにも現れていて、きっと自分が発するエネルギーやオーラにもそうした自由さが現れていたのだろう。

人間の発達というのは、確かに自由と解放に向かって進むプロセスらしいことが身を持って理解されてくる。実際にそれが自分に起こっているところを見ると、発達の本質として、自由と解放に向かうことがわかってくる。明後日からオランダに戻ることによって、なお一層このプロセスは進んでいくだろう。本当に大切な人たちだけと交わりながら、多くの人に資するような仕事を淡々と積み重ねていくそれを行うためには、精神が存分に寛げる場所、魂が高揚を感じながらにして平穏である場所で生活を営んでいく必要がある。今の自分にとっては、そうした場所がオランダであり、ここから数年後にはフィンランドがそうした場所になるような予感がする。先ほどもそのようなことを改めて思った。

---

今朝方は久しぶりに印象的な夢を見ていた。夢の中で私は、サッカーの試合に向けたミーティングを行っていた。そこには高校時代の友人が数多くいながらも、見知らぬ人たちもいた。彼らは一様に外国人であり、私は、アフリカ系の小柄な男性と話をしていた。彼は右サイドバックを務めており、彼からディフェンスの仕方を教えてもらっていた。チームメイト曰く、私は守備に課題があるらしかったので、彼からディフェンスの技術と心構えを教えてもらったことは実に有益であった。

今日の試合に向けて、守備に関する心構えができた私は、試合に向けて気持ちが高まってきた。試合には先発で出場することが決まっていたので、なお一層のこと気持ちが昂っていた。

いざ試合が始まると、教えてもらった通りに守備を精力的にこなしながらも、同時に攻撃にも積極的に加わった。すると前半から得点チャンスに恵まれ、ゴールを量産し始める自分がいた。最初のゴールは、右サイドからのクロスを頭で合わせたものだった。そこから前半のうちに数点ほど奪い、そのたびに自分の内側から熱いエネルギーが湧き立ってくるのを感じていた。

目覚めると、ベッドの上の自分の身体もまた熱かった。自分の内側には、絶えず情熱的なエネルギーが流れていて、自分の深層には、情熱のマグマが絶えず活動しているようだ。福井:2020/11/2(月)05:06

### 6371.【福井滞在記】最後の観光を終えて

時刻は午後8時を迎えた。今日は今回の一時帰国における観光の実質上の最終日であった。

今日は午前中に、福井県立美術館に足を運んだ。この美術館には常設展がないのか、企画展として「テレビアニメーション創成期から現在までの50年——エイケン制作アニメーションの世界——」だけを見た。密かにアニメ好きの私としては、とても懐かしいアニメに関する展示もあり、十分に楽しむことができた。美術館を訪れた後は、まだ時間があつたので、福井駅近くの紀伊国屋書店に立ち寄って、日本語のことわざ辞典や四字熟語辞典などを立ち読みし、来年は何か日本語の辞典を購入しようかと思った。日本に滞在して1ヶ月弱となるため、英語への飢えが抑えられなくなっており、またしても英語関係のコーナーに立ち寄って、パラパラと英文を眺めていた。



---

明日はもう観光することではなく、関空近くのホテルに向かって福井を朝に出発する。午前10時頃にホテルをチェックアウトすれば、ちょうど午後2時に関空近くのホテルに到着する。

オランダに帰ったらやりたいことが既に溢れてきている。1つには、オランダに持ち帰ってきた一連の文献をすぐに再読しようと思う。持ち帰る書籍の大半の初読は済んでいるが、まだ未読のものもあることは確かであり、それらについてはゆっくりとオランダに戻ってから初読をしよう。また、今月末までに可能であれば新居の目処を立てたい。

フローニンゲンでの生活も5年目を迎えており、自分を取り巻く諸々の状況から、そろそろ引っ越しをするタイミングだと思っている。今住んでいるところよりもさらに快適な場所に生活拠点を置く予定だ。そこには少なくとも4年間ぐらい住むであろうから、納得の行く場所を選ぼうと思う。物件の調査と決定は、慌てることなく、それでいて着実に進めていこう。

新たな場所に生活拠点を移すことによって、ここからのオランダ生活はより一層充実するであろうことがもう手に取るようにわかる。自分が身を置く環境は本当に大事であり、次の家は今よりもさらに理想的な生活環境となる。

紀伊国屋書店からホテルに戻ってきてから、3本ほど映画を見た。今日は随分と映画を見たものである。だが不思議と、それほど多く映画を見たという感じはない。映画に対する飢えも醸成されてきている。自分が映画鑑賞を通じて行っているのは、登場人物の世界を生きることと彼らが身を置いている社会を生きることであり、端的には代替的実存体験を積むことを行っている。自分が生きることのできない世界を、映画を通じて生きることになんとも言えない面白さを見出していて、それを通じて自己発見と自己拡張がもたらされている。当初は、映画を通じて人間心理とこのリアリティの諸相を知るということを目的にしていたが、外的にそれらを知ることが二の次であり、まずはそれらを内的に追体験することを大切にしていこう。明日もまた関空近くのホテルに到着したら何本か映画を見ようと思う。福井:2020/11/2(月)20:16

### 6372.【福井滞在記】今朝方の夢と明日のこと

時刻は午前5時を迎えた。昨日の福井は1日中雨だったが、今は晴れている。正午過ぎから雨が降るようだが、幸いにもホテルのチェックアウトは午前中なので、福井駅まで傘を差さずとも向かうこと

---

---

ができる。福井が午後から雨なので、大阪はどうかと気になって調べてみると、今日の大阪は雲一つない晴れとのことなので助かった。日本に滞在する最後の日である今日と、出発日である明日の大阪は快晴だ。これで気分良くオランダに帰ることができる。

今朝方は印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、日本の風光明媚な場所において、ホテルのチェックインをしようとしていた。チェックインには少し早かったためか、ホテルの受付付近に腰掛けてしばらく待っていた。ホテルの係員の女性からそのようにお願いされたのである。ソファに腰掛けてしばらくすると、私の名前が呼ばれた。正確には番号だったかもしれない。客の1人1人には番号が割り振られていて、私の番号は10番だった。

チェックインは個室で行われることになっていて、番号が呼ばれた私は、ガラス張りの個室に入っていくことにした。そこで対応してくれたのは比較的若い女性であり、その方が私に、ホテルの宿泊に際して記念に授与される品として何がいいかを尋ねてきた。

どうやら哲学書がもらえるらしく、私は中世、いや近代哲学の金字塔となるデカルトの『方法序説』の英訳版の書籍をもらうことにした。手には2つのスーツケースがあったが、なんとかその分厚い書籍を受け取ることができ、後ほど自室でゆっくり読むことが楽しみで仕方なかった。

チェックインが終わり、ガラス張りのエレベーターで目的階に向かうと、エレベーターから美しい景色が見えた。季節は秋のはずだったが、見事な桜の木々が見えたのである。それはまるで桜の大海であり、散る桜の花が波のように見えた。今朝方はそのような夢を見ていた。

目覚めた時に、夢の中の私がなぜデカルトの方法序説をもらったのかについて少しばかり考えていた。他の選択肢に目が行くことはなく、それを即座に選んだ自分。それを受け取った時に嬉々とした表情を浮かべていた自分に思いを馳せる。

明日はいよいよ日本を出発する。フライトの出発時間は午前11時である。搭乗は午前10時半頃になるだろうか。今回は移動の疲れを軽減させるために、アムステルダムに到着してからそのままフローニンゲンに戻るのではなく、アムステルダムで2泊することにした。アムステルダムに到着したその日は出かけることもせず、その日の夕方に到着することもあって、ホテルでゆっくりしようと思う。翌

---

日は、およそ5年半ぶりにアムステルダム国立美術館に足を運ぶ。最後にここを訪れたのは、フローニンゲンでの生活を始める前であり、フローニンゲン大学を下見しに来た時だったと懐かしく思う。

当初の予定ではレンブラント美術館にも足を運ぼうと思っていたが、近々誰かがアムステルダムにやって来るかもしれず、その人と一緒に行ってもいいかもしれないと思っている。こちらの美術館に足を運んだのも5年半前だ。レンブラントが今の自分を呼んでいるのかどうかは、オランダに到着してから判断したい。福井:2020/11/3(火)05:24

### 6373.【福井滞在記】フローニンゲンに戻ってからの楽しみ

朝風呂にゆっくりと浸かり、全身をよく温めて、全身の血流だけではなく、全身及び心のエネルギーまでもが活性化し、良好に循環していることを感じる。旅の最中において、朝風呂は早朝の友となった。フローニンゲンにおける生活では、朝浴槽に浸かることはせず、バランスボールで体をほぐした後、ヨガをして全身の血流を良くし、1日の活動に向けた準備を起床直後にしている。

フローニンゲンに戻ったらいくつか楽しみがある。1つには、引っ越し先を探し、新居を決定することである。可能であれば年末に引っ越しを完了させ、今年の年越しは新居で祝いたい。コロナがなければ、マヨルカ島かシチリア島で年越しをしようと思っていたのだが、それは来年以降に持ち越しである。あるいは、フィンランドかノルウェーの森のロッジに宿泊し、オーロラを見ながら年越しをしようかとも考えていた。それも近々実現させよう。

引っ越しに関してはとても気持ちが前向きであり、今回日本に一時帰国して、改めて取り巻く環境の重要性を実感した。今のフローニンゲンの家は落ち着いているが、もっと落ち着いた場所がフローニンゲンにあることを知っている。可能であれば、大きな道路に面しておらず、近くに公園などがあれば嬉しい。家賃に関しては、今のところよりも300ユーロぐらい上げてもいいだろう。日に換算すれば、1日わずか10ユーロ分の値上げである。

ここからのオランダ生活は、さらに明るいものとなるだろう。日本からオランダに戻ってきてからの自分は、もはやオランダを出発した際の自分ではない。離陸面と着陸面が異なるのだ。それを感じている。離陸面と着陸面が異なることを実感することができれば、それは旅の真髄を得ることができた

---

と言えるのではないかと思う。旅の前後で異なる世界観や内的感覚を獲得すること、以前と外見は同じでも内面は異なっていること。それが旅がもたらす発達効果である。

フローニンゲンに戻ってからのもう1つの楽しみは断食である。今回の一時帰国に際して、ベジタリアンであることは踏襲していたが、オランダで食べているものとは異なるものを食べていたことは確かであり、オランダに戻ったら以前と同じような食習慣を再度確立していく。そのために、まずは数日間ほど断食を行う。今回もいつものようにどれだけ断食をするかという日数を決めていないが、5日間ぐらいになるだろうか。最低でもそれぐらいは断食をして、延長するかどうかは状態を見ながら判断しよう。

オランダでは毎日バイオダイナミクス農法で作られたチーズを食べていたが、日本でチーズを食べることはほとんどなかった。チーズを食べなくても特に心身に変化がなく、むしろ調子が良かったように思うため、オランダに戻ってからはチーズを食べなくていいように思う。卵はオランダでも元々食べていなかったの、オランダに戻ってからはチーズや卵を食べないのであれば、ベジタリアンではなく、もはやヴィーガンに括られることになる。日本に戻ってきた時は、地元の魚などを食べることもあり、日本にいる間はベジタリアンとして過ごせばいい。

乳製品を摂らなくなると、皮膚の見た目と感触が向上する可能性があるとのことであり、確かに日本での肌の調子はオランダのそれよりもいいといつも実感する。最初私は水のせいかと思っていたが、どうやら水だけが原因のようではなく、やはり食べているものが影響を与えているようだ。従来はチーズから摂取していたカルシウムを補うために、カルシウムが豊富なケールを積極的に食べようかと思う。

ここ2日間こんにやくを食べていて、こんにやくの効能にも注目している。こんにやくは、「胃のほうき」や「腸の砂下ろし」と呼ばれており、体内のデトックスにはもってこいの食材とのことである。意外にも、こんにやくにはカルシウムが豊富であり、卵と同じくらいカルシウムが含まれているらしい。今日も関空近くのホテルから歩いて行けるところのスーパーでこんにやくを購入しようかと思う。また、フローニンゲンで断食をした後もこんにやくを食べて胃腸を綺麗にしたいと思う。そんなことを福井を出発する朝に考えている。福井:2020/11/3(火)06:31

時刻は午後9時を迎えた。今、関空近くのホテルの自室にいる。ホテルの自室は33階にあり、大阪湾を眺めることができる。また、遠くの方に紀伊山脈の姿も見える。眺めは実に素晴らしいが、高層階のせいか、WiFiの速度がいまいちである。

今日は予定通り、午後2時にホテルに到着し、速やかにチェックインを済ませた。そこから映画を1本見て、その後、夕食を買いに、散歩がてら25分ほど歩いた場所にあるスーパーに立ち寄った。関空近くはどれも人工的な生活空間が広がっていて、とても奇妙に感じた。この近辺に住んでいる人もいるであろうから、あまり悪く言いたくはないが、街の深層部分が泣いているように思えたのである。そしてその悲しみは、この街の人々にどこか伝播しているように感じられた。

スーパーでは昨日と同様に、こんにやくを購入した。フローニンゲンの自宅に戻ってからファスティングをするが、その前にこんにやくで胃腸を綺麗にしておこうと思った。こんにやく以外には、オーガニックの高野豆腐やサラダ類を数種類購入した。そこからホテルに戻って、夕食を食べながら映画をさらに2本見た。

本日見た映画は順に、『起終点駅 ターミナル(2015)』『ニンゲン合格(1999)』『ハイライズ(2016)』である。どの映画も印象に残っているが、ホテル近郊の街の雰囲気と共鳴して、『ハイライズ(2016)』が特に印象的だった。この映画では、フロアごとに階級が分けられ、上層階へ行くにしたがって富裕層になるという新築タワーマンションがテーマに取り上げられている。本作品を見ながら、そのモチーフはゾーニングの象徴であり、不幸にも人は、どんなに経済的に恵まれていても、あるコミュニティを形成すれば、その中で階層性(差別)を生み出すのだということを改めて知る。

金持ちであっても——金持ちだからこそという側面もあるだろう——、そうした階層性に組み込まれることによって、彼らはどんどん病的になっていく。そして、そうした病気の症状は誰しもの中にあり、それは埋め合わせることができないものなのかもしれないと思わされた。

現代人の心の空虚さと異常さを感じる。この映画を見ながら、人にはつくづく自然との触れ合いが必要だということも思った。それはありふれた考えかもしれないが、それがどれほど大事なことだろうか。人工物や人間を超えた何ものかと触れ合うことによって、人間は癒され、なんとか正常さを保つ

---

---

ことができるのではないかと思う。人工物の渦の中で生活をしていれば、狂ってしまうのも無理はない。仮に狂わなかったこととしても、機械化とゾンビ化の餌食になってしまうだろう。もともと人間は機械やゾンビ、そして狂人に墮する性質を内包しているのだ。この作品は、人間がいつも簡単に階層性をコミュニティ内に形成し、いともたやすく狂うことを教えてくれる力作だった。

明日は午前11:05のフライトに搭乗する。ボーディングの開始は10:25とのことである。少し早めに空港に行き、ラウンジで時間を過ごそうと思う。日本滞在最後の日に夢を見るだろうか。それを楽しみに、これから就寝準備を始めよう。大阪:2020/11/3(火)21:30

### 6375.【大阪滞在記】出発の朝に

時刻は午前5時半を迎えた。つい先ほど朝風呂から上がってきた。湯船にゆっくりと浸かったおかげで、今、体が火照っている。

いよいよ本日、オランダに帰る。今から2時間半後にホテルをチェックアウトし、関空に向かう。

昨夜ベッドの上で、この1ヶ月の日本滞在を最初から順を追って辿っている自分がいた。アムステルダムから関空に到着したその日から、文字通り、1日1日を振り返っている自分がいたのである。よくよく考えてみると、1ヶ月というのは意外と長いことに気づいた。それは年間の12分の1に該当する。その期間を日本で過ごしていたこと。それも単に1ヶ月を過ごしていたのではなく、書物や人、さらには景観との素晴らしい出会いがあり、とても濃密な形で過ごしていたことを嬉しく思う。

そうした振り返りをした後に、再びオランダで生活をしていく気力のようなものが湧いてきた。早くオランダで落ち着いた生活を再び送りたいという思いと相まって、その気力は自然なものでありながらも、同時にどこか根底に力強さを持っていた。

関空に到着したら荷物をチェックインカウンターに預け、セキュリティーを通過してラウンジに向かう。来た時と同様に、関空はまだ閑散としているだろうから、セキュリティーは速やかに抜けることができるように思う。そうであれば、ラウンジでは2時間弱、少なくとも1時間半はゆっくりすることができるだろう。そこで作曲実践をしたり、絵を描いたりしようと思う。必要であれば、少し仕事をする。

---

先ほど浴槽に浸かっている時に、ぼんやりと考え事をしていた。浴槽に浸かってゆっくりすることは、自分にとって極上の瞑想である。そこでふと、アセスメントについて考えている自分がいた。アセスメントというのは、そもそもある研究者の主観的な関心事項と主観的な体験に基づいて開発アイデアが生み出される。

そこから信頼性や妥当性を高めるために、諸々の操作が加わるわけだが、結局のところ、完成したアセスメントは主観の産物であるということを忘れてはならないように思う。仮にそれが、どれだけ客観性を担保してくれたとしても、根底にはある研究者の主観性が横たわっているのである。アセスメントの根源的なアイデアだけではなく、その信頼性や妥当性をどのように高めるかの操作に関して、その研究者の主観的なバイアスが加わる。そのような形で生み出されたアセスメントに対して、それを客観的なものとみなすよりも、むしろ主観の塊とみなした方が健全のように思えてくる。

アセスメントを主観の塊とみなすことによって、間主観的な対話の余地が生まれてきやしないだろうか考える。アセスメントが客観的な真実を開示してくれるものだと盲目的にみなしてしまうと、アセスメントの結果や、それを使う人たちとの間で対話が起りにくいのではないだろうか。一方で、アセスメントは主観的な産物であり、その結果については多分に対話の余地があるという考えがあると、結果そのものとの対話、そしてアセスメントを活用する人たち—アセスメントを提供する者と受ける者—との間に対話が起る余地が生まれるのではないかと思う。

こうした余地の有無は大きい。これはおそらくアセスメントだけに限らず、対象を客観的なものと盲信してしまうと、それが開示する客観性に疑いを挟むことができず、対話が生まれにくくなってしまふ。対話の未熟なこの現代社会にあつて、この点は重要なことのように思う。そのようなことを先ほど入浴中に考えていた。大阪:2020/11/4(水)05:53

### 6376.【大阪滞在記】日本出発前夜の夢

時刻は午前6時を迎えようとしている。この時間帯はまだ外は暗い。だが、大阪湾の上空に満月が浮かんでいるのが見え、その輝きに幾分恍惚感を覚える。

関空につながる高速道路は、この時間帯にもかかわらず意外と車が多い。本来は、ホテルから関空までシャトルバスが出ているようなのだが、コロナの影響でそれが運休になっている。むしろ、関

---

---

空までの道路が少し混雑している様子を見ると、電車で向かった方が早いように思える。宿泊しているホテルは駅と直結しており、関空まで1駅ほどのため、とても便利だ。来年もまた関空を使おうと考えていて、その時には今回宿泊したStar Gate Hotelにまた泊まりたいと思う。

少しずつ夜が明けてきた。今日の関空近辺は快晴のようであり、アムステルダムも天気が良いようだ。確かにオランダの気温は寒くなっているが、まだ真冬のそれではない。朝夕は随分と気温が低い、日中は暖かい格好をしていれば、それほど寒さを感じることはないのではないかと思う。

本日アムステルダム空港に到着したら、空港近くのホテルに向かい、自室でゆっくりと映画でも鑑賞しようと思う。明日は、アムステルダム国立美術館をゆっくりと鑑賞する。フローニンゲンに戻るのは明後日である。

今朝方は少しばかり印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、地元の海岸線を歩いていた。そこは、小学校の帰り道に時々歩いていた場所であった。私の横には、小中高時代の1人の友人(AF)がいて、彼と談笑しながら海岸線を歩いていた。すると、また別の2人の友人(HY & SM)の家が近づいていることに気づいた。だが、見渡しても彼らの家はなく、不思議だなと思っていると、その辺り帯は開発が進み、彼らの家は別の場所に移動されたということを知り友人から聞いた。

以前友人たちの家があった場所は、テーマパークのような場所に様変わりしていた。ところが、そのテーマパークのアトラクションの中に、彼らの家があるように見えたのである。端的には、時間の階層が知覚され、過去の階層のところに彼らの家がまだ残っていることが見えてきたのである。彼らの家が知覚されてきただけでなく、彼らの声もその時間層から聞こえてきた。

そして私は、彼らとその場で少し会話をし始めた。しばらく会話をすると、彼らはどこかに消えていった。それに合わせて、現在の時間層にいた友人もどこかに消えていた。すると、これまで海が見えてきた景色が雪景色に変わった。私の隣には、運動神経の良い親友(NK)がいて、彼とスキーとスノボの双方を楽しむことにした。彼は特にスノボがうまかったので、滑る技術について色々と教えてもらった。一緒に山からスノボで滑り降りていると、山中でカフェを見つけた。そこは木造りのカフェだった。



---

カフェの中に入ると、店員たちがみんなとても眠そうにしていた。話を聞いてみると、全員一睡もせずに働いているとのことであり、疲労困憊の様子だった。そうした状態の背後には経営者の問題があると私は思い、経営者に直接会って話をしたいと思った。すると、マネージャーのような男性が出てきて、自分たちはまだ働けるから大丈夫だということを述べた。

マネージャーに続く形で、ある女性の店員がポツリと、私の母もこのカフェで働いていることを述べた。母は年齢の都合上、毎日ではなく、それも短い時間だけこのカフェで働いているようであり、母だけ無理なく楽しげに働いているようだった。それを聞いて安心したが、母以外の人たちの状態が良くないことが心配だった。大阪:2020/11/4(水)06:24

### 6377. 思わぬ形でのバルト3国との接近

時刻は午前9時を迎えた。今、関空内のラウンジ六甲にいる。予定よりも早くホテルをチェックアウトし、午前7時半過ぎの列車に乗って空港に到着した。空港はとても閑散としていて、日本に到着した時よりも閑散ぶりが目立った。

空港に到着した時間は7時半過ぎであるから、それほど早いというわけではない。コロナの影響で人が本当にほとんどおらず、チェックインカウンターで荷物を預けようと思ったら、まだ開いていなかった。チェックインカウンターも軒並み無人のものばかりであり、KLMのカウンターは午前8時前にようやく開いた。

時間になると荷物を預け、セキュリティーに向かった。セキュリティーを通り抜けたのは私だけであり、パスポートコントロールもまたそうだった。このようなことは初めてであり、国外に出かけていく人の少なさを身をもって体験した。KLMの搭乗は、北ウイングの11番ゲートであることを確認して、ラウンジに向かおうと思った。

チェックインカウンターで荷物を預けた際に係員の方から、「申し訳ございませんが、今はコロナの影響でKLMと契約しているラウンジが使えない状況になっております」と言われ、それはとても残念であったが仕方ないと思った。その代わりに、クレジットカードと提携しているラウンジが空いているかもしれないと思ったが、関空内の店という店がほとんど閉まっていて、免税店ぐらいいか空いていない状況だった。

---

---

カフェやレストランは全くと言っていいほど開いておらず、カード提携ラウンジもダメかと思ったが、幸いにも今いるラウンジが開いていた。ラウンジに入り、カードとボーディングパスを提示した時に、受付の方と少し雑談をした。空港の閑散とした状況についてと、今後の回復の見通しについてである。

空港のこの閑散とした雰囲気は、もう随分と長いとのことだった。また、回復の見込みについても一切目処が立っておらず、その方曰く、3年から5年ぐらいかけてゆっくりと回復していくのではないかということだった。そこまで長期戦を予想しているとは思ってもいなかったが、確かに1年弱経ってもこのような様子が続いていると、回復の見込みがないのも無理はない。

北ウイングで開いているラウンジは唯一ここだけであり、そのことに感謝をし、受付の方にお礼を述べた。それにしても、本当に人がいない。ラウンジにいるのは自分1人だけである。そもそも北ウイングから出発する便が少ない。アムステルダムに向けて出発する便にどれだけ人が搭乗するのも不明である。ビジネスクラスはほぼ空いており、昨夜の段階で埋まっている座席は4席ほどだった。それでもアムステルダムに飛んでくれることに感謝したい。

先ほどまで、ラウンジに置かれている『Transit (トランジット)』という旅行雑誌を眺めていた。これはかなりしっかりとした作りの雑誌であり、発刊第47号として、今回は『特集:永久保存版 バルトの光を探して』というものだった。エストニア、ラトビア、リトアニアのバルト3国については前々から関心があり、いつか足を運んでみたいと思っていた。この雑誌の中では、政治・経済・文化・歴史の観点からそれぞれの国について紹介しており、とても参考になった。

無知ゆえに、バルト3国はどれも似たようなものだと思っていたが、そもそも民族も異なれば、経済状況や言語も異なることに驚かされた。雑誌の説明を読む限り、フィンランドに最も近く、フィンランドの弟分であるエストニアに対する関心が強まった。この国はITにも力を入れており、キャッシュレスの状況などは日本より上かもしれない。また、ラトビアについては、以前夢に出てきた「リガ」というのがこの国の首都であり、夢との繋がりからラトビアにも足を運んでみたい。最後にリトアニアであるが、雑誌の中で、ミカロユス・コンスタンティナス・チュルリョーニス(M.K. Ciurlionis: 1875-1911)という芸術家が紹介されていた。チュルリョーニスは、リトアニアで知らない者はないと言われるぐら

---

いに有名な芸術家らしく、35歳で夭逝したが、300点ほどの絵画を残し、音楽に関しては交響曲を2つ、ピアノ曲を約200曲、合唱曲を60ほど残しているとのことだ。

カウナスという街に国立チュルリョーニス美術館があるらしく、いつかそこに足を運んでみたいと思う。コロナの影響で、当初予定していたラウンジが使えず、今使っているラウンジに入ったのだが、思わぬ形でバルト3国と近しくなることができた。これもまた運命なのかもしれない。ラウンジ六甲@  
関空:2020/11/4(水)09:22

### 6378. アムステルダムに向かう機内より

アムステルダム行きの飛行機は、順調に空の旅を進めてくれている。今、眼下には白い雲海が見える。成層圏は透き通っていて、自分という存在を吸い込んでくれるかのようだ。できることならば、小さな自我を溶解させ、そこに飲み込んで欲しいと思う。それは小さな自我の望みではないことを考えると、今の自分はすでに小さな自我の外にいるのかもしれない。地上を眺めている自分のように、小さな自我を眺めている自分がいる。

先ほど機内食を摂り終えた。ベジタリアン食を注文し、それをペロリと平らげた。今朝チェックアウトしたホテルでは朝食をお願いしていなかったこともあり、またラウンジでは果物などの軽食ですら出されていなかったこともあり、半断食のような形でしばらくの間過ごしていた。

先ほどは前菜として3種類のチーズが出されたが、チーズを食べるのはしばらくやめにしておこうと思う。これまでオランダで食べていたバイオダイナミクス農法のチーズを食べることもやめ、本格的にヴィーガンとして生活をしていこうと思う。ただしこれはオランダで生活を営んでいる時に限り、旅行中はベジタリアンとして、時にチーズを食べたり、日本に帰った時ぐらいは魚を食べようと思う。だが、これからヴィーガンとしての生活を始めることによって、もはやチーズや魚を受け付けられないような身体が出来上がるかもしれない。

搭乗しているフライトのビジネスクラスの座席を見渡すと、客が数人しかいない。通路を挟んだ自分の隣にも、そして後ろの座席にも客はいない。後ろの後ろに1人だけ客がいて、最後尾に2人ほど客がいる。関空の閑散としている様子から、航空関係の諸々の会社の経営を心配する。

---

先ほど、パソコンの時間を日本時間からアムステルダム時間に変えた。日本は13時を迎え、オランダは朝の5時を迎えた。ちょうど日本にいる間にサマータイムが終わり、8時間の時差となった。ここからオランダは本格的に冬の時代に入り、5月末までの長い冬となる。

この長い冬がどれだけ自分の精神を鍛錬してくれることか。その恩恵は計り知れず、オランダでの生活が5年目となった今もまだ、この厳しい冬が自分の肥やしになっていることを毎年実感する。最初の冬で体験したような精神的過酷さはもはやないが、それでも時に深遠な冬の世界に存在が浸る瞬間があることは確かだ。今年の冬はどのように体験されるだろうか。

何かの香りを嗅いで、ふと何らかの記憶を思い出すという「プルースト効果」がよく起こる。先ほどのラウンジでもそれが起こり、昨日はホテル近郊を散歩している時にそれが起こった。過去のことを回想したり、夢を振り返ることを日々行うことによって、プルースト効果の強度が増しているように思う。そして、それが発揮されると、記憶のネットワークがより強固になるから不思議である。

昼食を摂りながら、機内エンターテイメントで『エジソンズ・ゲーム』を鑑賞した。エジソンが生きていた時代を再体験している実存体験があった。映画を通じて、エジソンと同じアイデアを同時代に持っていた人物がいたことを興味深く思った。いつの時代も、意外と同じことを考える人がいるものだ。

これから少しばかり仮眠を取り、その後、“The Last Black Man in San Francisco”という映画を見ようと思う。サンフランシスコで2年半ほど生活してきた自分にとって、この映画はまた昔のことを思い出させてくれるに違いない。映画から何かを知的に得ようとするのではなく、映画の登場人物の世界体験を感じるようにする。映画は、他者の人生を見せてくれるという外側の体験だけではなく、彼らの人生を生きさせてくれるという内側の体験もある。内側から登場人物の世界を生き、彼らの社会を生きようと試みること。それが自己の新たな側面に気づかせてくれることや、自己の世界をさらに開くことにつながるだろう。アムステルダムに向かう機内の中:2020/11/4(水)05:31(オランダ時間)

### 6379. 機内で思うこと

不思議と日記の執筆に向かう自分がある。書くこと。それは呼吸と同じものになった。曲を作り、絵を描くこともまた呼吸とほぼ同じようなものになっている。絵に関しては、最近朝と夜の2回だけしか

---

---

描いていないが、曲に関しては、もしかすると言葉を用いて自己を表現するのと同じぐらいの感覚で創作活動に従事しているように思う。オランダに戻ったら、さらにそれを徹底させていく。自然言語では手の届かない内的感覚と内的世界を音楽言語で表現していくこと。そのための努力は何一つとして惜しまない。

英文書籍を読む飢えが破裂寸前に差し掛かっている。密度の高い英語空間が存在していない日本に1ヶ月もいたのだからそれも無理はない。英文への飢えを満たす際に、断食後の食事と同様に、何を取り入れるかに細心の注意を払う必要がある。変なものを取り入れてはならない。言語空間においても階層構造が歴然として存在しており、ゴミ同然の言語的構築物を自己に取り入れられないようにする。

今のところ、フローニンゲンの自宅に戻ったら、音楽理論や作曲理論の学術書を大量に読み進めていこうと思う。すでに随分と多くの書籍を初読しており、そろそろそれらを再読かつ精読する時期に差し掛かっているように思う。もちろん、音楽関係以外にも、引き続き社会学や政治学に関する英文書籍を読み進めていく。また、新居に引っ越してからは、映画評論関係の英文書籍に関して気になるものは全て購入する。今のところ、リストに30~40冊ほど映画関係の書籍がリストアップされている。

フローニンゲンに戻ったら、読書と並行して映画やドキュメンタリーの鑑賞にも力を入れていく。昨日は3本ほど映画を見て、今日は機内ですでに1本見た。後ほどまた機内で1本ほど見る予定だ。

今日は午後3時過ぎにアムステルダム空港内のホテルに到着する。今この瞬間に思っていることなのだが、いくらビジネスクラスという環境の良いフライトに搭乗したとしても、11時間ほどのフライトはやはり心身に影響を与える。

アムステルダムに到着して、そこから電車に乗って2時間半かけてフローニンゲン駅に到着し、そこからまた20分ほど歩いて自宅に戻るのはさすがにしんどい。そうしたことを考慮して、今回はアムステルダム空港と目と鼻の先のホテルに2泊し、明日はアムステルダム市内の美術館に足を運ぶことにしたのだが、そのようにして本当に良かったと思う。欧州国内の旅行であればこのような配慮をし

---

なくていいのだが、日本と欧州の行き来だと、今後も同じように空港近くに少なくとも1泊してから自宅に戻ろうと思う。

来年もまた関空を活用するかもしれない。今年の成田や羽田の状態はよくわからなかったが、来年の関空の状態が今年よりも回復していることを本当に願う。コロナの検査は面倒であったし、ラウンジも思うように使えないというのでは大変不便だ。

来年もまたKLMにお世話になるか、来年はフィンエアーを活用してもいいかもしれないと考えている。実は今年はフィンエアーを活用する予定だったのだが、フライトが何度もキャンセルになったという事情があった。当初は、ヘルシンキ郊外に何泊かして、将来フィンランドで生活する生活拠点の散策をしようと考えていた。今年はそれに縁がなかった。おそらくこれも縁なのだと思う。来年仮にフィンエアーを使うことができれば、今年計画していた場所に足を運んでみようと思う。日本に戻る前にフィンランドで数泊し、日本からまたフィンランドに戻ってきて数泊するような計画を立てている。

来年は、今年よりも身軽な形で、機内持ち込み可能なスーツケース1つで日本に戻ろうと思う。来年は、青森や北海道を巡りたい。特に時間をかけて、北海道の何箇所かを電車でぶらぶらと旅したい。

今朝方の夢の中で、1週間の労働時間は1時間か多くても3時間だけだと述べた時、周りにいた人たちがキョトンとしていた。ここからは2週間に1時間の労働をし、次のフェーズとして1ヶ月に1時間程度の労働にし、最終的には労働時間をゼロにしようと思う。すでに生活費を得るためだけの労働というものには一切従事していないが、もうしばらくしたら、数年間ほど他者との仕事上の接触を完全に断ち切って、創作活動や読書、そして映画やドキュメンタリーを数多く見ていく生活に入ろうかと思う。

今自分には、1人で集中して没頭したいことがいくつもあり、それらだけに全身全霊で没頭する状態を作り上げていこうと思う。自己や社会の深層に触れるためには、自己と社会の表層と接してはならない。より極端でいて、それが実は人間存在にとって自然である生活をしていく。オランダで

---

の生活やフィンランドでの生活はそれを実現させてくれるだろう。アムステルダムに向かう機内の中:2020/11/4(水)07:46(オランダ時間)

### 6380. 始まりの始まり/多様な生命時空間

自らへの癒しと励まし。それは書くことと作ることを通じてもたらされる。

書き足りず、作り足りないことを日々感じている自分。それは至極当然である。なぜなら、今の自分はまだ何も書いておらず、何も作っていないのだから。

今時点で日記の数は6379となり、曲の数は5428となった。この日記を書き終われば、6380の日記となり、日記の執筆後には曲を2曲ほど作ろうと思っていたので、曲の数は5430となる。それがどうしたというのだろう。6380の日記と5430の曲は数のうちに入らない。それはほぼ無きものに等しい。今まで書いてきた日記や作ってきた曲は1に過ぎない。下手をすると、1にも満たないかもしれない。

高田博厚氏がかつて自分が作った作品を全て壊す行為に出たことが思い出される。思索と創作を同一のものとして進めていった高田氏にとって、自分が作ったものを壊すというのは、思索上かつ創作上の脱構築だったに違いない。

この間、大阪にいた時かどこかにいた時に、ふと思い出したことがあった。幼少期の頃の記憶がふと蘇ってきて、子供の自分の世界と両親の大人の世界には別の時空間が広がっているような感覚があったということを思い出していたのである。同じ物理的現実世界に生きていながらにして、異なる世界が存在しているというありありとした感覚だった。本当に人は異なる時空間を持つ異なる世界を生きているようだ。そこに他の生命を加えれば、この物理的現実世界には実に多様な時空間が存在していて、それが織物のように絡み合っていることがわかる。つい先日、福井の街を歩いている時にもそれを感じた。

生物学者のユクスキュルが述べる環世界というものが確かに存在していて、他の生命の豊かな時間を感じていた。そうなのだ。自分という存在は自らの生命時空間に閉じられているのではなく、他の生命の生命時空間に触れることが可能であり、その時空間の一端を感じるができるのだ。もっと言うてしまえば、他の生命の生命時空間の一端を通じて生きることさえできるのだ。おそらくそれ

---

が、命ある存在同士の交感なのだと思う。それは時空間的交感であり、それを通じてお互いの相互治癒や相互発達が生じるような気がしている。

1つの生命の生命時空間は、実に豊かな意味的・感覚的産物なのだ。それに触れて感激しないほうがどうかしている。

今、どのあたりを飛行しているのだろうか。フライトの残り時間は6時間半と表示されている。

昨日、人工的な匂いが漂い、近未来的な閑散とした雰囲気を出している関空近くの街を歩いていた。その時に、関空からオランダに11時間ほどで着けてしまうことについて考えていた。ひとたび関空から飛行機に乗れば、あとは何もせず11時間ほど飛行機に乗っていれば、いつの間にかオランダという遠く離れた別の国に到着してしまう。

敬愛する高田博厚氏、森有正先生、辻邦生先生たちがパリに渡った時代は、40日間かけて日本からフランスに船に乗って移動していたのだ。船での移動には大変な側面もあっただろうが、少なくとも時空間的には連続的なものがあつたに違いない。

正直なところ、日本と欧州を飛行機で移動するのは、自分の中では瞬間移動に等しいような、時空間的断絶感がいつも付き纏う。それによって、日本なり欧州なりに到着すると、ある種の変性意識状態となり、感覚が随分と変容していることに気づく。それはとても内省的かつ自己沈潜在的な意識状態であり、内側に向かってどんどん意識が向かっていくような状態である。

後ほどオランダに到着したら、おそらくそうした意識状態になるだろう。意識状態というのは一時的なものなのだが、それが一時的である分、印象的な体験を伴うことが多い。自分にできることは、こうした意識状態の変化は異常なものではなく、自然なものであり、状態の変化を見極めながらにして、ゆっくりと状態を整えていくことだろう。

意識状態の変化するグラデーションを感じ、それによって伴う思考や感覚を形に残しておくことも有益かもしれない。さて、そろそろ曲を作ろう。5429番目と5430番目の曲。それらもまだ1番目の曲に過ぎない。全ての曲を1番目の曲とみなすことは、常に新たな出発だという認識ともつながるもので



---

あり、初心を忘れないという意味においてそれは大切な心がけかもしれない。アムステルダムに向  
かう機内の中:2020/11/4(水)08:08(オランダ時間)